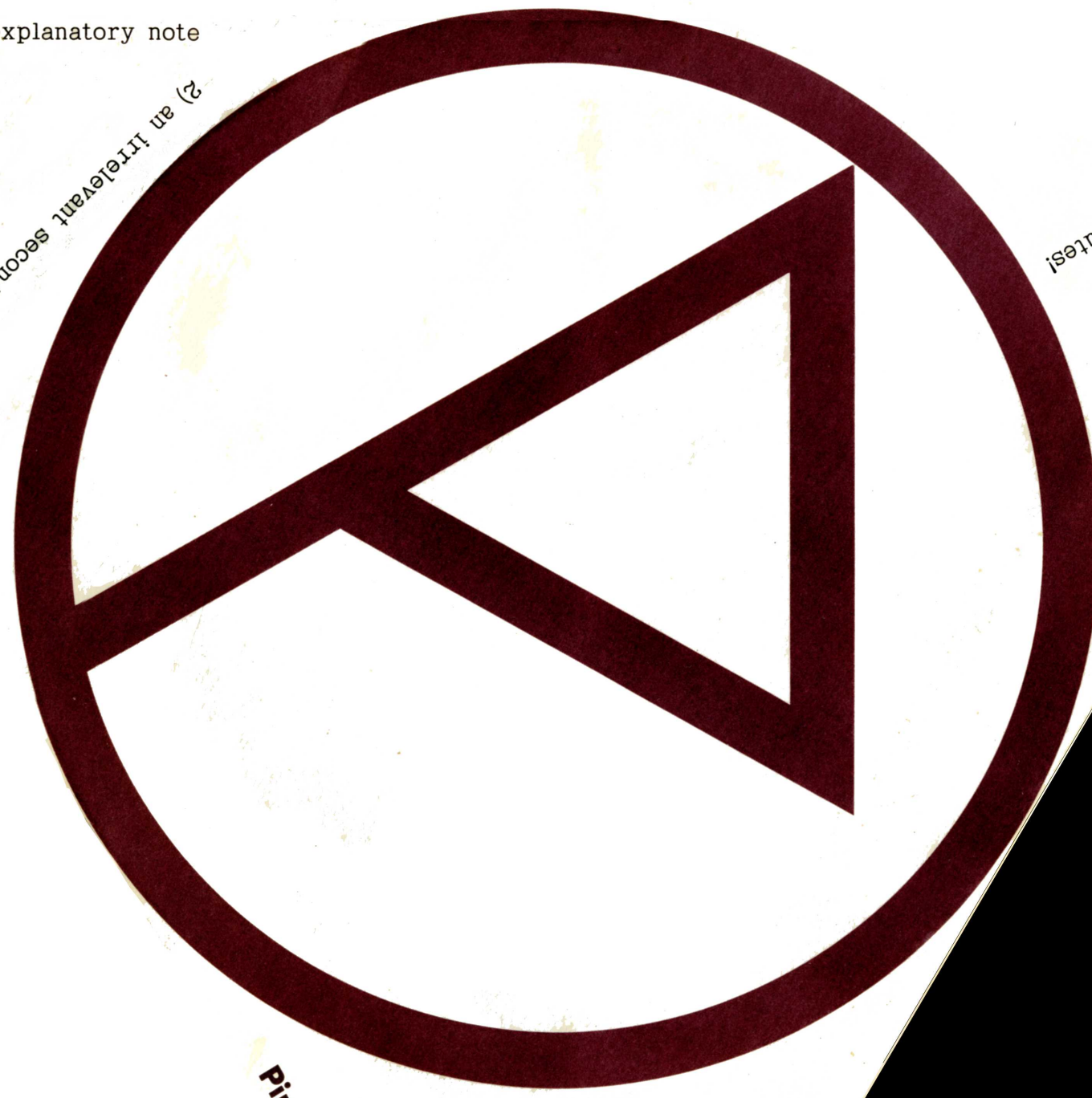


appendixes: 1) a pathetic explanatory note

2) an irrelevant secondhand ep.
Pinakotheca records pr-0

33.31 p.m. 17 cm 1p / total: 20 minutes!



Anode / Cathode
punkanachrock

Pinakotheca Records

punkanachrock: anode/cathode



アノデカソードの音楽用新案特許出願中(アノデカ(社))



〒185 東京都国分寺市内藤1-5-19
郵便振替 (東京9・33578) ピナコテカレコード
PINAKOTHECA RECORDS
5-19 Naitoh 1-chome Kokubunji-shi,
Tokyo, Japan 〒185



compositions/performances: anode/cathode
original recording: 1975(?)~1977(?)
location: unknown engineering: edona death co.
final selection/edition: anarkiss
production/distribution: pinakotheca records
photos: a.i. art direction: y.k./k.f.
thanks to: m.i./h.t./y.s./y.s./y.m./t.h./k.f./s.a./t.s./k.n./
s.n./many others

“PUNKANACHROCK”

ANODE/CATHODE

「第三の極」あるいは磁性帯上のピクニック

Anarkiss

①「終わり」のはじまり、あるいは「予兆としての終末」

例えば、ひとつの部屋があり、そこにひとつの椅子があり、その椅子には「私」がい、その部屋にたったひとつしかない窓から曇ったガラス窓越しに暮れゆく光景を眺めている視線がある。しかしそれは決して完全に闇を迎える為の儀式ではなく、おそらくは永遠に凍てついた薄暮の時でありまた二度と光を約束しないルシフェルの降臨と記憶さえさかだかではない巨大な昏睡の歴史をあらわすさかしまな朝なのかもしれない。あらゆる光景から「時」が抜けおち、さらに視線さえも何処にも到達し得ずただ「彼方」という予感めいた方位へとただよっていく。全てのものが自らの中に実容と裏切りを抱えこみ、確実に加速度としての死をかうまわだしていく。そして「私」といえば自らをあまたのどよめきの中から「今」というみじめな一瞬を選びとり、部屋と椅子と視線を用意したにすぎない。魔城がいざなるのではない。現とはまさに予見されて魔城のメタファーであるにすぎない。「時」は死んだ……。

②西海岸の「未明」より ～Anode/Cathodeとの出会い

かつてロナルド・ザースが「我々が『音楽』を聴き得ない。我々が聴くのは『音楽』の影であり、『聴きうる』ことは非在へのオマージュとしてでしかあり得ない」と記したように、我々には既に閉ざされた「鎮城」としての「音楽」しか残されておらず、仮に非・知・非・合理の門からそこへ侵入しようともそこは常に具現であり、真にラディカルであるとする人間であれば、その事実が圧倒的なオブセッションとして『個』の解体をせまっておしよせてくるのを感じ、また『聴きうる』ことがさらにそれ自身を聴いているのだということを知るであろう。これは歪曲でも比喩でもなく、限りなく己と向い合うことを自らに課した者にとってまさに直感とある事であり、また危険な認識でもあるのだ。私とそして Anode/Cathode との出会いもそのようにしてあった。

私の友人Mは3年前アメリカ西海岸をひとりで放浪していた。彼はロスで知りあった男に、怪しげなプロトで行われるあるグループのパフォーマンスに招待され、同行した。しかしMの目的はそのパフォーマンスへの参加そのものではなく、そうしたパティシメい場所では当然の如く回されるドラッグにあった（Mは音・音楽といった問題には全く興味いぼど無関心であり、音程は膨大な量の神祕学とドラッグ関係の香物に埋もれている男なのだ。……観客をわずかに20人程度で、その半分が招待客残りほどはこからかきつけてやってきたマニアックなファンとのおぼしき連中であつたという。そしてそのこじんまりとしたパフォーマンスの主催者こそが Anode/Cathode であり、マニアの間ではごく限られた地域で半ば伝説として半ば噂としてはしか存在してはなかったグループなのである。彼らは機材の山に囲まれながらいつとはなしに『演奏』を始めていたらしいのだが、Mは開演前から回され始めたドラッグが効いてきたために、ごくおぼれげにしか記憶が無いという……。やがてMがアメリカを離れようとしていた頃、例の知人が訪ねてきて、1本のテープを手渡した。彼がMに語ったところによれば「Anode/Ca-thodeのメンバーはMに大変感謝している。

君のような人間が演奏を聴きに来たのはたいへん幸運なことだった。記念にこのテープを進呈したい——これには Anode/Cathode のスタジオ・ワークスがアンソロジーとして収録されている」ということであつた。一体自分が彼らに何をしたのかMには全く分らなかつたし、その知人もよく分らないという。ともかく、そのテープはMの旅行カバンの中隅に収まり入るほど小さく入っていたのである。

Mの帰国後しばらくして私は彼の部屋を訪ねた。Mはアメリカでの奇妙な想い出として、そのパフォーマンスのこのことをそしてその時に回ってきたドラッグの話を私にしてく

れた。そのドラッグはありとあらゆるドラッグを試みた微にも正体のつかめぬ不思議な作用をもたらしたという……。そして話の最中に彼は突然思い出したようにカセットテープを取り出し、私の前に投げ出した。彼の部屋には音の出るものといえば古びたトランジスタラジオしかなく（それも少しばかり使っていない様子だった）、仕方なく私は、ささやかな期待を抱きつつ彼の他の土産とともにそのテープを借りて家へ帰った……。

そして私はこのグループは是非ともレコード化して多くの人々に紹介すべきだという書めにも似た意志を持つこととなつた。私はMの記憶とつてを頼りに彼らと直接連絡をとろうとし、またロスに住む何人かの友人にも再三彼らに関する情報を送ってくれるように頼んだ。……しかし結局 Anode/Cathode と直接に連絡をとることはできなかった。しばらくして友人の一人が彼らに関するわずかで不確かな情報を伝えてくれたが、そうした状況から判断すると Anode/Cathode(彼らは少なくとも五人のアメリカ人——うち一人は日系人ともいわれる——から成るが、全員そろって演奏することはまれであり通常二、三人で極端な場合は一人だけでテープをバックにギグを行っていたらしい)は解散あるいは活動を停止したとみてよいようだ。そしてMが招かれたパフォーマンスが事実上彼らの最後のギグであつたということになるらしい。(Mはこの不思議な幻のようなグループが存在することを証明する貴重な存在となつた訳だが、その彼もここ数年月間行方不明である。)

③Anode/Cathodeの示す位相

今ここにある一枚のレコードは不意ながら私が編集した Anode/Cathode のまさに記録である。この記録を聴く人々の多くは、彼らの演奏を今流行の数多くの忘れ去られるべき音楽と同一視しまた比較して、凡事的はずれのたわごとがそこかしこでささやかれることだろう。しかしいつの世にも世迷いごとをもてあそぶ言語ピエロたちは存在する。そして彼らやその眷族の舌にもてあそばれて演奏はそれが本来持つ毒を抜き取られる。『音楽』はそのようにして風化してゆくのだ。しかし Anode/Cathode を内包するのはそのようにしてではなく、寧ろまさに『ひるがた』としてあり、拡散と浸透を内包するのは凶気と化して現のさかかに異景を垣間見ぬ知覚のカレドニア・スロー・トリップ・グラスとしてであり、限りなくうつろな磁性帯に記された磁束密度の微分的变化パターンとしてでしかない。同様のことはスロッシング・グリスルズ、ディス・ヒート、オルタネイティブ TV、キャパレー・ヴォルテール、クローム、レジデンツ、そして西海岸に轟く L.A.F.M.S.、エアウェイをはじめとする数多くの凶々しき啓示者たちにも言えることかもしれない。しかし Anode/Cathode のどこまでもシンプリファイされたある種の悲惨なまでの「さわやかさ」は鮮やかであり、聴く者の意識を「聴くこと」→「聴きうること」の異極へ引き裂くものだ。彼らの持つ位相は我々が即興性と無意識の可能性の間に拡がる体験的空間を見いだし得るべく用意された「新たな鍵」であり、「意識」→「無意識」という二極的な図式の裏容をせまるものであることに疑いはない私には思われる。かつてのジャーマン・ロックが有していたあの自虐的なまでの創造力を我々は今全く異なる形でここに聴くだろう。彼らの導く『第三の極』で我々が見いだすものは果たして輝くカラテなのかそれとももう一つの地獄なのだろうか。いずれにせよこのレコードが我々を『音楽』の極へと向かわせる危険なうながしとなることは間違いないのだ。

最後に再びザースの言葉を私は引かなくてはなるまい。

「見るのを見ることはできない。聴くのを聴くことはできない」(1940年ウィーンでの講演より)